保護司会連絡協議会会長賞

助けを求められる社会を

堺市立　大仙小学校　六年

畠中　葵彩

毎日起こる犯罪。これをどうすれば無くすことができるのだろう。犯罪や非行をした人達はどんな思いで毎日を生きてるのだろう。私は社会をどうすれば明るくすることができるのか考えた。

私が二年生の時の三月にあった出来事だ。朝早くにインターホンがなった。家がむかいの人。お父さんが、話を終えて家に入ってきた。

「バイク、盗難された。」

その時、私は、

「なんで？」

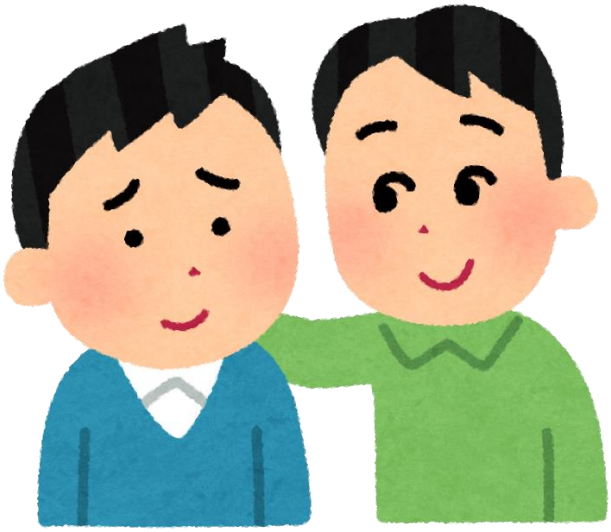
このひと言しか出なかった。

しかし今、この日の事を考えてみると、犯罪をした人は何もなく、盗難・強盗・殺人などはしないだろう。きっと社会へのうらみやストレスなどで人生に生きづまり、犯罪・犯行に手を出してしまう。この人も何か社会にうらみがあったのだろうか。気に入らない事があったのだろうか。今この日本、社会に足りない事を考えてみると、人に相談する事が難しいというのが現実だ。この人のように犯罪した人を犯罪者としてみるのではなく、自分達と同じふつうの人間として、公平に接する事、犯罪に手を出してしまいそうな人ほど相談に乗る事が大切なのではないかと私は思う。

次に、一度犯行を起こしてしまった人が、再犯してしまう人が多くいるとテレビやニュースで聞いたことがある。そしてある記事には、このような事が書いてあった。

「一度刑務所に入った容疑者は、刑務所を出ても、どうやって生きていけばいいのかわからなくなり、再犯してしまう。」

この記事をみて私は、被害者に、悲しみや苦しみ、つらさを与えてしまった加害者も、同じくらい、もしかしたらそれ以上の悲しみや苦しみ、つらさを抱えてることを感じた。

私はこれから、社会を明るくするために、犯罪に手を出してしまう人を止めるのではなく、相談する、心のケアをするということが大切だと考える。私がこの先大人になっても犯罪が完全にこの世界から消えることはない。しかし減らすことはできるのだ。困っている身近な人の相談に乗る、もしこれを自分にされたらど

んな気分になるのだろうと人の気持ちを考えることで、少しは、社会が明るくなるのではないだろうか。